

インド東部・オリッサ州の仏教徒コミュニティについて ーヒンドゥーとの関わりを中心としてー

DASH Shobha Rani

(龍谷大学アジア仏教文化研究センター2010年度公募研究員・大谷大学文学部国際文化学科講師)

目次

1. はじめに
2. オリッサの仏教徒の分類
3. オリッサにおける仏教徒の人口
4. サラーカ仏教徒の歴史
5. 仏教徒の村マーニアーバンダ
6. マーニアーバンダ村民の仏教信仰
7. サラーカコミュニティに見られるヒンドゥー要素
8. サラーカコミュニティのユニーク性
9. おわりに

【キーワード】オリッサ、仏教徒、サラーカ、マーニアーバンダ、機織り

はじめに

紀元前六世紀頃にインドで誕生した仏教は、アショーカ王の時代にはインドを飛び立ち、東南アジアや南アジアの国々にも伝播し、まさに世界宗教となる土台を築きあげた。しかし、様々な要因により徐々にその存在が薄くなって行き、現在インドにおいてはほぼ滅亡状態になっている。現在インドで仏教徒といえば、一般的には、アンベードカルの指導のもとに興った「ナヴァヤーナ」(Navayāna)という新仏教徒のことを指すことが多く、幾多の研究結果も残されている。しかし、ヒンドゥー教徒が80%以上を占めるインド社会においては全く目立たない存在ではあるが、新仏教徒とは異なる伝統を持つ仏教徒たちがインド東部・オリッサ州の一部に存在する(図1:インドの中で／におけるオリッサ州の位置及び調査地域)。その存在は無視することができない。彼らは新仏教に改宗した者ではなく、古来よりの仏教徒の子孫であり、現在も自らを大乘仏教徒であると主張している。「サラカ」という仏弟子を意味するカースト(Sarāka-jāti)に属している。本論文では彼らのことを紹介し、ヒンドゥー教が優位を占めるインド社会において、彼らがどのように自分たちのアイデンティティを保ち続けているのかを考察する。

オリッサの仏教徒の分類

オリッサの「仏教徒」と言われる人々は、以下の三つのカテゴリーに分けることができる。

1. ナヴァヤーナの仏教徒

インドの他の地域にもよく見られるように、カースト制度の最下層に置かれる「ダリット」(不可触民)たちの中には、ヒンドゥー社会の差別から解放されたいという目的で改宗し、ナヴァヤーナのグループに所属する者たちが多くいる。2007年4月14日に起こった出来事はその一例である¹。オリッサ州ケンドラーパラー(Kendrapada)地区のケラダーガル(Keradagarh)にある約300年の歴史を持つジャガンナート寺院がある。その寺院に入ることを拒否されたことが発端となって、アンベードカルの生誕日に当たる4月14日に約1000人のダリットたちが集団で仏教徒に改宗したことがあった。ここで注目すべき点は、彼らの改宗には、彼らが仏教の教えに感化されたということよりも、ヒンドゥー社会への強い抗議の意思が表れているということである。

2. 正式に改宗をした個人仏教徒

社会の最下層のダリットだけでなく、バラモンやクシャトリアなど上位カーストの者たちも、近年、ヒンドゥー教から仏教へと改宗している例が見られる。彼らは、役所へ関係書類を提出し、個人単

¹ オリヤー語の新聞『サムバーダ』(Sambāda), 2007年4月15日。

位で仏教に改宗している。家族すらも含まれない。(ダリットの場合は、コミュニティ全体で集団改宗する例が多く見られる。) これは非常に稀な事例であるが、近年はこのような傾向を持つ改宗者が増えつつある。彼らは特定の宗派やグループ等に属さない仏教徒である。2011 年の調査の際に協力を仰いだブバネシュワルの大菩提会幹事(secretary)である Dr. S. K. Mohapatra はバラモン階級出身者であるが、現在は改宗して仏教徒になっており、仏教の教えに基づいた教育を普及させる努力をしている。「Mohapatra」はオリッサにおけるバラモン階級の者が持つ姓の一つであるが、彼はその姓を用いながらも、カースト制度を否定する仏教徒になっている。同様に改宗している他の人々の場合も同じであった。Mohapatra 氏に改宗の理由を尋ねると、「仏教の魅力にひかれて」と答えた。

このようにして「ヒンドゥー教／カースト制度への抵抗」と「仏教の教えの影響」という二つの目的で、近年、仏教徒に改宗している人々が存在する。

3. 古来より続く仏教徒

オリッサで仏教が栄えていた時代に存在していた仏教徒たちの子孫のことである。彼らの 99%は手織りや染色を生業にしている。オリッサでは、一般的な織り手は「タンティー」(tanṭī)と呼ばれるが、それと区別するために彼らは「バウッダ・タンティー」(bauddha-tanṭī)、つまり仏教徒の機織りと呼ばれる。彼らはさらに2つのグループに分かれる。それはサラカ・タンティー(sarāka-tanṭī)とランガニー・タンティー(rāṅgaṇī-tanṭī)である。前者は機織りであり、後者は織糸中心の染物屋である。

オリッサにおける仏教徒の人口

オリッサ州の仏教徒について考察するには、まず、オリッサにおける全仏教徒が人口のどの程度の割合を占めるのかを把握する必要がある。そのデータをいくつかの資料に基づいて提供したい。まずは、国勢調査のデータである。2011 年の第 15 回国勢調査は終了しているが、宗教に関する正式なデータはまだ公開されていないため、2001 年に行なわれた第 14 回国勢調査のデータに基づく。2001 年のデータによればオリッサの仏教徒は 9,863 人であった²。つまり、オリッサの全人口の 0.02%を占めていることになる。それに比べてヒンドゥー教徒は 94.35%にも達する。

別のある研究調査によれば、オリッサには約 120,000 人の仏教徒が 17 カ所の主要町村に居住しているようである³。すなわち、それは全人口の約 0.32%を占めることになる。調査を行なった Mohanty 博士を

² Census Reference Tables, C- Series Population by Religious Communities (www.censusindia.gov.in を参照)

³ Mohanty, 2006, p. 110.

尋ねると、彼は自ら調査を行なったと言ひ、仏教徒の一部の村落の詳細データも公開している⁴。このデータによれば東オリッサの古来より伝わる仏教徒のみの数は1,965家族に属する10,260人になる。これは国勢調査のデータに示されている全仏教徒の数をも遙かに上回っている。

上記の二つのデータ以外に、マーニアーバンダ村の在家仏教徒協会がおよそ5年前に行なった調査によって得られたデータもある。そのデータは、オリッサに古来より居住する仏教徒のサラカたちの数を1,177家族とする。一家族が8人で構成されていると大雑把に仮定すると、その数は9,416人になるであろう。

さらに、1949年に発行されたサラカコミュニティについて初めて述べた本によれば、当時すでにサラカ仏教徒のみでも8000人はいたとされている⁵。

これらのデータは全く一致していないことが一目瞭然である。なぜこのような差が生じるかは疑問である。異なるデータは存在しているけれども、ともかく、それはオリッサ州にある程度の仏教徒が住んでいることを証明している。このような理由から、オリッサにおける仏教徒コミュニティの正確なデータを調査し収集することが必要である。それを今後の課題としたい。

サラカ仏教徒の歴史

次に、本論文においては、上述の、オリッサに居住するいにしえよりの仏教徒の中のサラカコミュニティを中心に考察する。このコミュニティでは全員自分の名前の後に「∞サラカ」という語を付ける。（「サーラカ」というのはサンスクリット語の「シュラーヴァカ」<śrāvaka 仏弟子>が変形したものであると言われる。シュラーヴァカ(śrāvaka)→サーラカ(sāraka)→サラカ(sarāka)というように変化した。）残念ながら、サラカコミュニティの起原や歴史を伝える資料は非常に少ない。その限定された資料を以下に紹介する。

1. 『マダーラーパーンジ』(Mādaḷāpāñji) : 12世紀以降のオリッサの王朝の歴史や出来事を記録する年代記。いくつかの編纂されたものがあるが、本論文では Arttaballabha MOHANTY (ed.), *Mādaḷāpāñji*, Friends' Publishers, Cuttack, 2001 を参考にする。
2. Sadashiba PATRA, *Buddhadeba o Baudhdhadharma*, published by N. C. Das, Badamba, 1949 : 今から約60年前、マーニアーバンダ村のSadashiba Patra氏によってオリヤー語で書かれた小さな私家版の著書である。現在のところサラカコミュニティの歴史や社会構造についての唯一の著書であり、最も参考にすべき資料であると言える。小学校の教師をしていたPatra氏はマーニアーバンダ村のサラカコミュニティの

⁴ Mohanty, 2006, pp. 111-112.

⁵ Patra, 1949, p. 139.

一人であり、今でも村人たちに大変尊敬されている人物である。今回の調査の際に氏の息子と話をしたところ、氏はこの本をいくつかの貝葉写本、そして当時、生き菩薩と称される村の唯一の出家者であった Madana Debata 氏(「amara parama bauddha sanmyāsī」<不滅で第一の仏教徒僧侶>と村人たちに称される)から口伝で伝えられたことに基づき本書を書かれたとのことである。

3. Sarita DASH, *The Buddha Tantis of Orissa: Culture, Identity and Resurgence of an Ancient Guild of Buddhist Weavers*, Society for Environmental Action and Restoration of Cultural Heritage, Puri, 2002 : サラーカコミュニティについて書かれた著書であるが、Patra 氏の存命中、近くの村の Sarita DASH 氏が彼と会い、彼から得た情報に他のいくつかの二次資料を加えて、書き上げられたものである。これは、結局 1 と 2 の資料を主に参考にして書かれているため、1 と 2 の資料を中心に、サラーカコミュニティの歴史を追ってみたいと思う。

しかし、これらの資料及び伝承にはところどころ矛盾しているため、サラーカコミュニティの正確な歴史を明かすのは甚だ難しいが、それを以下のようにまとめて、彼らの歴史に関する一つの考えを整理した上で、その仮説を述べたい。

中世オリッサには大勢の仏教徒たちがいた。Madana Mahādeba 王 (Rajarajeswara II 1170-1194) 王の仏教迫害により、一時的に彼らの存在が目立たなくなったが、PD 王の時代まで約 300 年の間に徐々に復活した。Pratāparudra Deba 王 (1490-1538. 以下 PD と略す) 王は仏教徒に対して悪意を持っていなかったが、王妃の一人はバラモンを尊敬していたため、テストに負けた仏教の僧侶を追い出すことにした。ここでは、テストに参加していた僧侶のみが追い出された可能性が高い。その時に、何らかの理由で Chaudwar にベンガル州の Bardhaman の Jayanandi 村から来た 50 人のサラーカ (在家の仏教徒) たちがいた。さらに、プリー近郊の Damodarpur にも大勢の仏教徒がいた。PD 王とその王妃の Lakṣmīdebī が彼らをパトロンして、4 人の代表者に別々の機会にターバンを巻いて名誉を与えた。その 4 人の代表者から後に 4 つの氏族(thāna)ができた。それは今も継続している 1. Pratāparudra thāna, 2. Chaudwara thāna, 3. Dāmodarapura thāna, 4. Lakhīrā thāna である。理由は明らかではないが、ベンガルから来た仏教徒たちの姓が今も多く用いられていて、サラーカたちの方言に少しベンガル語の影響があることに気付く。

仏教徒の村マーニアーバンダ

バダンバー(Badamba)、ティギリアー(Tigiria)、バーンキ(Banki)、アータガル(Athagarh)、バーリビシ(Balibishi) — オリッサのこの 5 つの地域は「五つの [仏教] 国」(pañca rājya)と言われ、「オリッサ在家仏教徒協会」(Oḍiśā Bauddha Śrābaka Samāja)を組織している。サラーカを自称する仏教徒たちは主にこれらの地域に居住している。その内、Badamba 地域のマーニアーバンダ(Maniabandha)村は、村の全

人口の約80%を仏教徒が占める最大の仏教徒の村である。「オリッサ在家仏教徒協会」の約10000人の仏教徒の内、約4000人がこの村に住んでいると言われている。

サラカコミュニティの村落のことは「サラカ・パンタ」(Sarāka Pantha)と言われる。コミュニティ全体は上記の4つの氏族に分かれている。これらの4つの氏族中3氏族はマーニアーバンダ村に住んでいる。

マーニアーバンダは州都ブバネシュワルから北東約85キロメートルの距離に位置する小さな村落である。言い伝えによれば、「Māñiā」は「mañi」(つまり真珠)から、そして、「bandha」は「Buddha」から由来しているという伝承がある。故に、「Maniabandha」は「ブッダの真珠」という意味を持っていると言われている。

村人たちは自分たちのことをマハーヤーニー(Mahāyānī)と言い、新仏教徒ではないと主張する。むしろ、彼らは自分たちをオリッサのみならず、全インドにおける唯一の「伝統的に継続している仏教徒」であると信じている。

三蔵法師玄奘はこの村を訪れたことがあり、その時に村人たちはとても細かく織り目のサリーを法師に贈呈し、法師はそれを一本の竹の中に入れて持ち帰ったとその子孫たちは言い伝えている。三蔵法師が訪問するほど仏教の由来を持っていたこと、そして約六メートルもありながら竹一本の中に入るほど細かく織られたサリーは、織物職人の高度な技術を表わすものとして今なお人々の自慢の種である。この伝承が、どこまで歴史的な事実に基づいているのかは判断し難いが、三蔵法師がカリंगा地方(現在のオリッサ)へ旅したことは『大唐西域記』によって確認できる⁶。そして、その中に述べられている補澁波祇釐僧伽藍(Puṣpagiri Mahāvihāra)はマーニアーバンダ村からそれほど遠くないところに位置しているので⁷、このような伝承も全く無視することはできない。

日本山妙法寺大僧伽の創設者藤井日達上人(1885~1985年)が1970年11月22日にこの村を訪問されたとの記録が残っている。州都ブバネシュワルの郊外にあるダウリギリ(Dhauligiri)の近くに流れているダヤー川(Dayā 慈悲を意味する)は歴史的に有名なカリंगा戦争の闘われた場所としてよく知られている。現在もアショーカ王の勅命で刻まれた11の石碑が残されている。そのすぐ側に藤井上人が世界平和を願って建立した真っ白の仏舎利塔がある。その塔の建立の際にマーニアーバンダの仏教徒コミュニティは自ら進んで大きな労働力を提供したため、藤井上人はその協力を評価し、村のほぼ中心に小さな記念柱を建てた。村人たちも藤井上人のことを「フジイグルジー」と親しく呼んでいた。

ドライラマ14世法王も1973年この村を訪問した。その際に彼は、この仏教徒コミュニティの発展の

⁶ 『大唐西域記』巻第十、T51、p. 928b~c.

⁷ DASH, 2009, p. 1.

ために 20,000 ルピーを寄付した。この寄付金でダライラマ機織り協同組合(Dalai Lama Weavers' Co-operative Society)という組織を立ち上げ、仏教徒コミュニティをまとめ、系列化している。

マニアーバンダ村民の仏教信仰

この村には6つの小さな仏教寺院がある。その中の、1920年ごろに建立されたスニアーパートナー・サーヒ(Suniāpātāṇā sāhi⁸)にある寺院はメインの寺院として扱われている(図2: Suniāpātāṇā sāhi の仏教寺院)。寺院の入り口に上座部仏教徒によってよく唱えられるパーリ語経典の一部「*namo tassa bhagavato arahato sammā sambuddhassa*」(かの阿羅漢であり、正覚者である世尊に帰依し奉る)がオリヤー文字で刻まれている(図3: パーリ語・オリヤー文字で書かれた仏典の一部)。これは後に1957年ごろに加えられたようである。寺院の頂上にインドの国旗、仏教の旗と法輪(dharma-cakra)が飾られている。寺院にインドの国旗が飾られているのを見たことがなかったため、その理由を尋ねると Debata 氏は「我々の信仰やカーストが何であろうか、まず私たちはインド人であるに違いないので、多信仰の統一性の象徴である」と答えた。

寺院内に小さな仏像以外に2体の大きな仏像が安置されている(図4: Suniāpātāṇā sāhi 寺院内に祀られている2体に仏像)。一つは最も一般的に見られる触地印(bhūmisparsa mudrā)を結んだ座像仏であり、シンプルな袈裟をまとっている姿である。これは、1954-55年ごろミャンマーから寄贈されたものである。しかし、その前の約1925~1930年に安置されたと言われるもう一体の仏像は注目に値する。この仏像は、比較的豪華な袈裟をまとい、首飾り等も身に付けている。仏陀の三十二相の一つである烏瑟膩沙(うしつにしゃ *uṣṇīṣa* 頂上の肉)の変わりに頭の上に結髪(jatā)が見られる。四本の腕を持つこの座像仏は両前腕で瞑想している姿の定印(dhyāna mudrā)を結び、両後ろ手で与願印(varada mudrā)を結んでいるように見える。村人たちはこの仏像のことを苦行者の姿(tapasvī-rūpa)と恩恵を与える姿(aśīrbāda-rūpa)の合体した形であると言う。

この村には出家を希望している者が2人いたが、出家の方法などについて全く伝承を有しないため、結局出家者は現在では一人もいない。過去にはこの村から一名のみ出家者が出ている。前述の Madana Debata がその一人であるが、彼は菩薩として村人たちに奉られている。百年以上も前に活躍した彼の写真を見せてもらったが、彼は、外見上は仏教徒の僧侶の格好をしておらず、むしろどこにでも見られるような一般人の格好をしていた(図5: Maniabandha 村の唯一の出家者 Madana Debata 氏)。

中世に仏教とヒンドゥー教の交流により、『シシュヴェーダ』(Śiśuveda)という五番目のヴェーダ文献が

⁸ オリヤー語でサーヒは〜町の意味をする。

書かれた⁹。サラカたちによって使われていた貝葉写本などにそのヴェーダについて述べられている。これは、サンスクリット、パーリ、ベンガル、オリヤー語など多くの言語が混ざって、何とか意味を理解できるが、文法上、その解釈は難しい。幾つかの断片的な部分を彼らは口伝で覚え、様々な宗教儀式の際に今も唱える。特に、以下の文は結婚式やその他の儀式の際に多く用いられる¹⁰。

ahirṁsā paramadharma bairabaddha bibarjita | niḷācala nibāsāya bauddharūpī namonamaḥ | namaste
baudda debāyaṁ anantaṁ śīrabhūṣaṇaṁ yogamāyā śubhadañca madhye śrī bijaye tathā | jagannātha
guru buddhañca dharmacakra sudarśanaṁ | oṁkāra brahmamūrttiṁca caturmūrtti sthitaṁ bhajet |

これらのお経を覚えて、誰でも結婚式、葬式、命日などの行事を行うことが可能である。そのために特別なヒンドゥー教の僧侶のような職はない。他人のために行なう時に、お布施や報酬をもらう習慣もない。このような役割を果たす者はカルマニアー(Karmaṇīā つまり様々な宗教行事<karma>を行なう者)と呼ばれる。現在、Keshaba Chandra Patra 氏がその役割を果たしている (図6：カルマニアーの約を果たす Keshaba Chandra Patra 氏)。

このコミュニティの人たちは自分たちのことをマハーヤーニーと称しているが、大乘経典ではなく、パーリ語の上座部仏教の経典を唱える。さらに、Sadashiba Patra 氏によって著わされ、マーニアーバンダ仏教徒協会によって出版された『ダμμαパダ』(Dhammapada)<1978年>、『トリラトナ・バンダナー』(Triranta Bandanā)<1997年>、『ブッダー・リーラー』(Buddha Līlā)<1998年>、など固有のテキストも用いられる。

『ダμμαパダ』は有名な仏典『法句経』のパーリ語原文、及び、オリヤー語で詩形式を用いて書かれたその解釈書である。

『トリラトナ・バンダナー』は、花、お香、灯明などを用いた仏法僧の三宝の供養方法、五戒(pañca śīla)とその説明、二十八過去仏への帰依文、供養により得られた功德の回向(puṇyānumodana)、許しを請う文(kṣamā prārthanā)などについてパーリ語で書かれた本であり、オリヤー語の解釈文も付いている。

『ブッダー・リーラー』は仏陀の誕生から入滅までの生涯が詩形式で書かれたオリヤー語の書物である。最初の祈願文及び最後の守護を請う讃頌はパーリ語で記されている。テキストの中に所々仏典からパーリ語やサンスクリット語の偈も引用されている。上記の『ブッダー・リーラー』と合わせて、詩はナヴァークシャリー・チャーンダ(navākṣarī chānda)と言われる9文字を使用したオリッサの最もポピュラ

⁹ Patra, 1949, p. 148.

¹⁰ Patra, 1949, p. 148.

一な韻律に基づき書かれている。そうすることによって人々に唱えやすくすることが目的である。

これらの作品は **Patra** 氏のサラーカーコミュニティだけではなく、オリッサにおける仏教徒たちへの偉大な貢献を物語っている。

上記の『トリラトナ・バンダナー』に記されている供養方法とその供養文はスリランカを始めとするタイ王国、ビルマなどの上座部仏教の国々では昔から使われていることが確認された。彼らは、自分たちは大乘仏教徒であると口伝により信じており、日本の日蓮宗の藤井日達上人やダライラマ 14 世法王とも接触があるにも関わらず、大乘仏教的な經典や供養方法を用いないで、テラヴァーダ様式に従っている。村人たちと話しをしたところ、彼らは大乘仏教徒と言っても、実は、テラヴァーダと大乘仏教の違いすら知らない。単純に五戒を守り、三帰依文を唱え、仏陀を崇拝する（詳しく知っている者でも四諦や八正道まで）といった単純なやり方だけで彼らは仏教への信仰を表わしている。

サラーカーコミュニティの仏教への信心深さは彼らの毎日の生活に見られる、ある小さな例からも窺える。通常、オリッサにはサーラという樹の葉やバナナの葉を食事の時に皿代わりに使用する。しかし、この村で私は蓮の葉に乗せられた食事をいただいた。通常のやり方と異なり、彼らは蓮の葉の裏側を使っていた。なぜならば、蓮の葉の表側は仏陀のために用いられるのが常だからである（図 7：食事の際使用される蓮の葉）。

この村に限らず、サラーカーコミュニティの全ての人々は在家仏教徒のために定められた五戒(*pañca sīla*)つまり、不殺生戒、不与取戒、不邪淫戒、不妄語戒、不飲酒戒を厳しく守る。第一の不殺生戒を守るために、彼らは完全に菜食である。野菜であってもニンニク、タマネギ、カリーフラワーなど不浄や無知、怒り、性欲、高慢等を生じさせる(*tāmasika*)と思われるものも口にしない。

サラーカーたちはオリッサにおけるカースト制度やサブカースト制度に属していない。彼らは「サラーカー」という特別なカースト(*Sarāka-jāti*)に属する。マーニアーバンダ仏教徒協会は 1973 年の創立以来、その幹事を務めている **Debata** 氏によれば、土地所有名義認証書に彼らは昔から「サラーカー」というカースト名を記していたが、過去 10 年ほど前から「バウッダ・サラーカー」と記している。彼らの用いる **Mahāpātra** という姓はオリッサのバラモンカーストの姓と同じであるが、サラーカーたちの場合、それは性というよりも本来族の主としての役職である。1996 年 12 月 6 日(12011/44/96-BCC)¹¹よりサラーカーたちは「他後進階層」(**Other Backward Classes**)に属することになり、インド政府からの援助が届くようになった。

彼らの仏教への信仰はその職業にも反映されている。昔から受け継がれている村人たちの唯一の職業は機織りである。これは、「マーニアーバンダ様式」と呼ばれるオリッサの優れた織物技術の一つである。

¹¹ National Commission for Backward Classes の公式サイト www.ncbc.nic.in を参照。

この職業は釈尊が示した八正道の一つである正命(*sammā-ājīva*)に導かれているため、彼らも最も適している職業であると信じている。なぜならば、この職業により殺生したり、人を憎んだり、人に嘘をついたり、誰にも精神的・肉体的に害を与えたりしないからである。不殺生の戒律を厳格に守るために彼らはシルクの機織り作業はしないことにしている。仏教の教えと出会う機会は十分ではないが、彼らは自分たちの織物技術を通じて釈尊の教えを少しでも人々に伝えることを願って、仏陀のイメージや八正道、三帰依文、四諦等をオリヤー文字で織っている。これは売り物としてではなく、仏法普及のための贈り物として使われる（図8：仏陀の教えが織られた贈り物）。

サラカコミュニティに見られるヒンドゥー要素

前述の *Sunia Patana Sahi* の寺院はヒンドゥー寺院に非常に似ている。ヒンドゥー寺院の入り口のライオンの門(*śimhadvāra*)と同じく二頭のライオンが立っている。寺院の頂上にある旗と法輪(*dharma-cakra*)は、オリッサのジャガンナータ(*Jagannātha*)寺院において普遍的に見られる青輪(*nīlacakra*)を思いださせる。ジャガンナータ寺院は必ずヴィシュヌ神の持ち物である輪(*cakra*)によって飾られる。オリッサにおいてジャガンナータ神はヴィシュヌ神の10体の化身の内の一つ（第9番目）と見なされる。なお、通常はヴィシュヌの第9番目の化身は仏陀とされている。

この寺院の毎日の宗教行事はヒンドゥー教の仕来りで行なわれている。クリシュナ神やヴィシュヌ神に捧げられる聖なるトゥラシー(*tulasī*)葉は仏陀にも捧げられる。この寺院を訪問する時に神様のお下がりとしての葉と聖なる水をいただくことがある。このような風景はオリッサのどのジャガンナータ寺院に行っても見られる。

しかし、面白いことにクリシュナ神の神像もすぐ側に安置されて、仏像がそれと並んで供養されている。さらに、寺院のすぐ側にトゥラシーの大きな樹がトゥラシー・チャウラー(*tulasī caurā*)と呼ばれる寺院の形をした高い台の上に植えてある（図9：トゥラシー・チャウラーに祀られるトゥラシー樹）。これもオリッサのヒンドゥー教の女性の日常生活に欠かせないものである。オリッサのヒンドゥー教の女性、特に既婚女性は、朝の沐浴後必ずトゥラシー樹に水を注いで供養する。サラカ女性たちも同様に行なっている。

既に述べたように、オリッサのカースト制度には従わないが、サラカたちもある種のカースト制度を持っている。同じ古来よりの仏教徒であっても、彼らはランガニー・タンディーの仏教徒コミュニティと婚姻関係を決して持たない。それは彼ら独自のカースト制度に準ずるものである。「サラカ・カースト」同士以外の結婚は決して許されない。ちなみに、スリランカの仏教徒の間にもカースト制度が存在する。

結婚式を見て、直ちにヒンドゥー教の式と区別を付けることは難しい。サラカたちもヒンドゥー教で行なわれるハスタ・バンダナ(hasta-bandhana¹²)やアグニ・サークシー(agni-sākṣī¹³)などのメイン儀式を行なう。

Debata 氏の息子は大学院の教育を受けた人である。彼の妻が数ヶ月前他界した際、彼はプリーにあるスヴァルガドゥヴァーラ(Svargadvāra)、つまり「天国への入口」と言われるヒンドゥー教徒にとって最も望ましい火葬場で妻の火葬式を行なった。彼は、仏陀とともにヒンドゥー教の他の神々にも毎日ギー(ghee)の灯明を捧げる。彼と再婚した妻はコンピュータサイエンスを専門にした教育を受けている。彼女は他のヒンドゥー女性のように毎週金曜日に断食してサントーシー女神(Santoṣī-mātā)の供養を行なう。

このように、高度な教育を受けた者でも、仏教徒でありながらヒンドゥー教のやり方に従うことは、仏教徒が長年ヒンドゥー社会と共存してきた結果と言えるであろう。

サラカコミュニティのユニーク性

サラカコミュニティの日常生活やその宗教概念を考察した結果、以下のようなユニーク性が認められた。

1. ヒンドゥー教社会との平和な共存：今までにヒンドゥー教徒たちと如何なる理由によっても争いはない。マーニアーバンダのヒンドゥー教徒とサラカコミュニティは結婚式やその他の儀式にお互いを招待しあったり、参加したりする。そこには宗教の壁は全く存在しない。
2. ヒンドゥー教の神々を祀る：すでに述べたように、サラカたちは仏像と一緒にクリシュナ、ラクシュミーやジャガンナータなどヒンドゥー教の神々も祀っている。マーニアーバンダの近くにあるヌーパートナー(Nuapatana)村でもサラカたちがジャガンナータ三兄妹（すなわち Jagannātha, Balabhadra, Subhadra）を仏陀と並べて祀っているのを見た。ヒンドゥー教でヴィシュヌ神やクリシュナ神のために用いられるトゥラシーの葉を仏陀にも捧げているということは、彼らがヒンドゥー教に対して拒絶感を持っていないことを示す。
3. 宗派を問わない：サラカたちは宗派という概念に捕われていない。先祖が大乘仏教徒であったという伝承があるため、その子孫たちも自分たちは大乘仏教徒であると主張しているが、実際上はパーリ語の経典を唱え、テーラヴァーダ式の供養方法を行なっている。しかし、彼らはそれがテーラヴァーダ式であることすらも認識していない。
4. 新仏教徒と異なる考え：Navayāna の信徒たちのためにアンベードカルは22の誓いを規定した。その

¹² 花婿と花嫁の手を結びこれからの人生を共に過ごすことを誓う儀式。

¹³ 護摩を焚いて、火の神を証人とし、その前に夫婦として誓う儀式。

内9つは本論文に関係していると思われるので、以下にそれらを取り上げる¹⁴。

1. 私はブラフマー、ヴィシュヌ、マヘーシュ（シヴァ）を神と認めないし、また崇拜もしない。
2. 私はラーマとクリシュナを神とは認めないし、また崇拜もしない。
3. 私はガウリーやガナパティのようなヒンドゥー＝パンテオンの男神・女神のいずれを神とは認めないし、崇拜もしない。
4. 私は化身（神々が化身となって現われるという信仰）を信じない。
5. 私はブッダが神の化身であること、すなわち彼がヴィシュヌのアヴァターラであることを信じない。逆に私は、それは偽りの宣伝であると考える。
6. 私は祖霊祭¹⁵を行なわないし、祭餅¹⁶をそなえることもしない。
8. 私はいかなる儀式や祭式も、バラモンの手によって執り行なわせることをしない。
19. 不平等主義に立ち、若き日の私の進歩の妨げとなったヒンドゥー＝ダルマを、私は告発し、また拒絶する。そして私は仏陀のダッマを選ぶ。
20. 私は仏教こそが唯一の真の宗教であると確信する。

サラカコミュニティはこのような排他性の考え方に全く賛同しない。これらの誓いを一切しないということで自分たちは新仏教徒とは異なる存在であると主張している。

さらに、新仏教徒とは異なり、サラカたちは仏教徒になるための入門式(*dikṣā*)を行なわない。

5. 仏教徒としてのアイデンティティを捨てない：表面上はサラカたちはヒンドゥー教徒となんら変わりのない生活を送っているように見えるが、一步踏み込んで中を覗いてみると、そこに彼らの仏教徒としてのアイデンティティがあるのは明白である。例としてあげると、結婚式はオリッサにおけるヒンドゥー教徒の家庭で行なわれる結婚儀式と同じであるが、サラカたちの場合は、必ず仏陀が式場に祀られる。そして、招待客へ送られる招待状をみると、それもヒンドゥー教徒の招待状と全く同じで、そこではガネーシャ神やヒンドゥー教徒の結婚祝いを象徴する模様がメインに描かれていたりするものの、中には仏陀、三帰依文や菩提樹の葉の模様など仏教的な象徴も必ず見られる（図10-1・図10-2：あるサラカ仏教徒の結婚招待状）。
6. 分離ではなく統一性を信じる：サラカたちは、インドの仏教徒コミュニティであるから、インドの大部分を占めるヒンドゥー社会の一部であることは彼らにとって当然なことである。お互いの宗教を

¹⁴ 山崎元一、1979年、136～137頁。

¹⁵ *śrāddha*. 先祖に対する供養。その際にバラモンに食物を与えるやお布施をする習慣がある

¹⁶ *piṇḍa*. 祖霊祭の供物

尊敬し合い、平和に共存することこそが、彼らは仏陀の真の教えであると信じている。

7. バランスの良い融合性：上述の中世から使われているお経の文を考察すれば、オリッサの守護神ジャガンナータと仏陀は平行して描かれている。前者が上位を占め後者が下位を占めているとは言えない。ヒンドゥー教に仏教が混ざってしまっているというよりも、両教の美しい融合が見られる。
8. ヒンドゥー社会による歓迎：他宗教の人はブリーにあるジャガンナータ寺院に入ることが厳しく禁じられているが、恐らく上記のような寛容性及び包括性の特徴を保って継続しているため、サラカたちは問題なく入ることができる。さらに、タンティー（機織りのカースト）はオリッサのヒンドゥー社会において最下層と見なされ、厳しい場合は不可触民の扱いを受けることもある。しかし、同じ機織りのカーストに属してもサラカたちは「バウッダ・タンティー」（仏教徒の機織り）であるため、カーストによる差別の対照にならない。

おわりに：

サラカたちが過去にオリッサやその周辺に住んでいた大乘仏教徒の子孫であるということを証明できるような確かな資料は現在のところ確認されない。しかし、過去十数年に渡って、この村からあまり遠くない場所で発掘が行なわれ、9カ所の仏教遺跡が見つかったことから、その近辺にかつて仏教徒が存在していたとは言えるであろう¹⁷（図11：仏教徒コミュニティの村落及び仏教遺跡が発掘された地域）。

オリッサにおけるサラカコミュニティは、宗教的な寛容さだけではなく、ヒンドゥー教が優位を占めるインド社会において「伝統的な仏教徒」として自分たちのアイデンティティを継続しているという視点からみても、最も適切な事例であろう。彼らは仏教徒であるが、ヒンドゥー教の神々を崇拝することをも躊躇しない。彼らは自らを大乘仏教徒の子孫であると信じているが、テーラヴァーダの経典を唱えることやテーラヴァーダ様式の儀式を行なうことにも抵抗を感じない。他宗教だけではなく、彼らは仏教徒の中にも見られる派閥の狭い考え方に捕われることなく、世界平和に貢献している理想的なコミュニティを代表していると言えるであろう。

参考文献

1. Beal, Samuel, *Si-yu-ki : Buddhist Records of the Western World*, Vol. II, Kegan Paul, Trench, Trübner & Co. Ltd. London, 1906.

¹⁷ Dash, 2009, p. 1.

2. Dash, Sarita, *The Buddha Tantis of Orissa: Culture, Identity and Resurgence of an Ancient Guild of Buddhist Weavers*, Society for Environmental Action and Restoration of Cultural Heritage, Puri, 2002.
3. Mohanty, Arttaballabha (ed.), *Mādaḷāpāñji*, Friends' Publishers, Cuttack, 2001 (in Oriya).
4. Mohanty, Bimalendu, *Glimpses of Buddhist Legacy: With Special Reference to Orissa*, Maha Bodhi Society of India, Kolkata, 2006.
5. Mohapatra, Bimal Chandra, *Buddhism and Socio-economic Life of Eastern India: with special reference to Bengal and Orissa (8th – 12th centuries AD)*, D. K. Printworld, New Delhi, 1995.
6. Patra, Sadashiba, *Buddhadeba o Bauddhadharma*, published by N. C. Das, Badamba, 1949 (in Oriya).
7. Sterling, Andrew, *Orissa: Its Geography, Statistics, History, Religion and Antiquities*, published by John Snow, London, 1846.
8. Vasu, N. N., *The Modern Buddhism and Its Followers in Orissa*, published by the author, Calcutta, 1911.
9. DASH, Shobha Rani 「仏像起原説再考—オリッサ出土の磨崖仏からの試論—」『仏教学セミナー』第90号、大谷大学仏教学会、2009年12月、pp. 1-17。
10. 山崎元一『インド社会と新仏教—アンバードカルの人と思想』刀水書房、1979年。
11. インド政府国勢調査に関する公式サイト (<http://www.censusindia.gov.in/>)
12. インド政府後進階級委員会に関する公式サイト (<http://www.censusindia.gov.in/>)



图 1



图 2



图 3



图 4



图 5



图 6



图 7



图8



图9



图10-1



图10-2



図11